



トン、トン、と階段を上がるのはゴム製の黒いサンダル。右手の小さなコンビニのビニール袋はカサカサと音を立てて揺れる。カンカンと高い音を立てるヒール靴は、長いこと履いていなかった。おしゃれをする必要がなかったし、そうする気もなかったからだ。

鍵を開け、電気を点けばなしの自分の部屋に上がる。サンダルを脱いで、居間のソファに座り、買って来たばかりのおにぎりをペリペリと空けて食べる。ふと顔を上げると、ガラスに映った自分を客観的に見て、ああ、醜いな、墮落した人間だなと思った。くすりと笑う。

この部屋は、私ともう一人のためだけに借りられた広い部屋。2DK。少し広すぎるこの部屋をなぜ借りたのか、私は知らない。田舎だけれど、家賃はそんなに安くない。びっくりするほど高くもないけれど。

私がある時、テレビをつけたのは虫の知らせというものだったのかもしれない。ここ半年、2DKの居間にあるテレビをつけるということはほとんど、なかった。自分の頭とは別々の生き物のように、私の指がリモコンを操作した。

「——次のニュースです。先日、千里町の海岸で見つかった女性の遺体の身元が判明しました」
テレビから流れる女性アナウンサーの声に、私はびっくりとした。点けた意識がなかったからだ。夕方のワイドショー。髪をきれいに巻いた彼女が言ったのは、何百回と聞いたことのある名だった。

「遺体は先月の末より行方不明になっていた秋吉 七海さん、——」

私はゆっくり咀嚼するようになんとかその意味を見つけ出した。

秋吉七海が、遺体で見つかった。

私、秋吉姿子の、実の妹だった。

風が、とても冷たい。庭の柿の葉を揺らし、落としていく。

実家に帰るのは、一年ぶりと言ったところだ。その間暮らしていた2DKから電車で二時間。私は黒い服を着て、実家へ帰ることとなった。否、実家はもう、私の「帰る場所」ではない。けれど、今まで住んでいたあの2DKも、私の帰る場所とは言えそうになかった。あの部屋にこもりながらも私はそれを感じていた。行き場のない、迷子。

母は私の姿を見て、涙を溢れさせた。それが一年間音信不通だった私への怒りなのか、七海と引きかえに戻ってきた私を見て、あの子が死んだことを実感しての涙なのか、また、それ以外の何かなのかは私には分からなかった。

「姿子」

母は私の服にしがみつき、しゃくりあげながら泣いた。

「お母さん。...七海は」

喪に服した母は、駄々をこねる子供がするように首を横に振った。

「...あんなに、酷い...」

あとの言葉は、聞き取れなかった。酷い、死に方。まだ、十六だったのに。

玄関で話していた私たちを父が見つけ、ゆっくりと歩いてきた。

「姿子」

弱々しい声で私を呼ぶ父は、一年前より十歳も老けて見えた。

「お父さん」

「七海はそこにいる」

どきりとした。父の言い方はまるで、その指が差した先の部屋に七海が生きたままいるかのようだった。私は浅く頷き、崩れ落ちそうな母を父の胸に預けて、一年ぶりに実家の畳を踏んだ。

——秋吉七海さんの遺体は、ナイフで刺された跡があり——

妹を見るのが、怖かった。

——警察は、秋吉さんは何者かに殺害されたと——

七海の抜け殻は、彼女が大好きだった、私のお下がりのワンピースにくるまれていた。

襟の高い、長袖でロングスカートのワンピース。その下に、刃物で傷つけられた跡があるなんて、思っただけで肩が震えた。

私は七海から少し離れた畳に座った。頬に熱いものが流れていくのを感じた。ポタ、と滴が畳に落ち、色を変えて染み込んでいった。

七海、私を責めていますか？

七海、あれから一年、あなたにはいつか会えると思っていたんです。今生の別れだなんて思っていなかった。こんなことになるだなんて。

——死亡後に暴行された、——

七海、どうしてこうなったのですか？

それから、七海が骨になってしまうまで、私は七海の顔を見ることができなかった。私が見ていいものでないという思いと、やはり、この妹が少し怖かったのだ。式には、マスコミのカメラが何台も来ていた。黒いレンズは青白い私や母、参列者の姿を捉えていた。

お姉ちゃん。

お姉ちゃん、お姉ちゃん、と、七海が、私の妹が、私を呼ぶ声が、聞こえる気がする。

七海、いつまでも姉妹いっしょにはられないのよ。

私は、そう言った。私は変わってほしかった。妹に。妹と私の関係に。妹の私を見る目に。私だけを見るあの妹に。でも、心の奥で、七海とはどこか繋がっているような、たった一年家を出たくらいでは何も変わらないと思っているようなところがあった。テレビを点けるあのときまでは。

いつまでも姉妹いっしょにはられないのよ。

でも、こんな別れだなんて。

七海のいない世界を見て、私は泣き崩れた。父が私を抱きしめ、カメラの大きなレンズが私たちに向けられた。大砲の口が向けられているようで、恐ろしかった。この人たちは七海が死んでも泣かないのだ。私や、このかわいそうな母とは違うのだから。大砲の口から吸い取った私や父の姿を、私が七海の死を知った画面から流し、悲劇に祭り上げる。

七海は、この世界にいなくても良かった人間なのではないでしょうか。神様がいるのなら、そう聞きたかった。母を、父を、七海を傷つけた私でなく、七海だったのはなぜなのでしょう。涙は溢れ、カメラは私を捕らえ続けた。

すべてが終わったあと、泣き疲れ、布団を敷いた上に仰向けになって、天井を見上げた。あの部屋よりも高い天井。子供のころ、木目が人の顔に見えて怖かった。妹である七海より、私のほうが怖がり、ひとつの布団で一緒に眠った。

一年ぶり、だ。一年前の私は、二十歳。好きな人がいた。三つ年上の人。彼は高校を出てから、家のために働いていた。彼の家は、父親が早くに亡くなっていて、母親が一人で自分を育ててくれた、その母に恩を返すのだと、いつも笑っていた。けれど、彼の母は病を患っていた。それを知らされすぐに、逝った。彼はぬけがらのように、ただ、仕事をして、家に帰る、それだけの生活をしていた。

そんな彼は、私に、家族になってほしいといった。守るもの。それが欲しい。それは、姿子でなければいけない。彼はそう言ってくれた。うれしかった。秋吉姿子を必要としてくれる、この世にただ一人の、私の番いのひと。私が求めている、私を求めてくれる人。私は、すぐ頷いた。けれど、私たちは二十歳と二十三歳だった。結婚するにはまだ早い。それが、私の両親の言葉だった。家に挨拶をしに来た彼は、そうですね、と力なく笑った。私は、このままでは駄目だと思った。父や母を捨てても、彼を私が守らなくてはならないと。その頃の彼は、まるでこの世とあの世の境にいるかのように生気がなく、希薄な存在に感じられ、このまますとん、と落ちるように魂が抜けてしまうのではないかと思われた。早朝の駅で、ビルの屋上で、自らのてのひらに背中を押され、死んでしまうのではないかと。

それだけでは、なかった。私は、ただ一人の妹である七海が、怖かった。中学三年になっても、私を追い続ける妹。彼女の外見は、七年前の私そのものだった。自分よりも大人の姉を慕う。それだけなら、良いのだ。私だって、気付かないうちは嬉しかった。妹にこんなにも慕われていることが。けれど、七海は、私しか見ていなかった。同級生の男の子も、クラスメイトの友人になりえる相手も、父や母すらも。ただひたすらに私を追って生き、私にだけ心を開き、私になろうとしていた。そのことに、私以外誰も気付くことはなかった。七海は、私とそっくりの外見でいながら、間逆とも言える性質だった。不器用な私の、間逆。心をうまく伝えることのできない私の、間逆。上手に私に化ける。それでいて、私と同じ、残酷な、性質。誰にも気付かれることなく七海は姿子に、なろうとした。私と同じものに。

「お姉ちゃん以外は皆ゴミみたいなものよ、

いつだったか七海は笑顔で私に言った。自分に必要のないものだ。恋人も、友人も、両親すらも要らない存在。自分に必要なのはお姉ちゃんだけ、と。

駆け落ちのきっかけは妹だった、そう言っても間違いじゃない。彼を守りたい気持ちがつづり、そして、自分に執着する妹を自分から引き離し、姿子は姿子、七海は七海として生きたかった。いつの日か、家に帰られる日が来たなら、姉妹として、あいたかった。

貯金をすべて下ろして、大きなトランクに服を詰め込み、私は家を出た。七海と私、両親の四人が写った写真を一枚持って。その写真に写る七海は、私の真似をして生きる七海ではなかった。幼かった私たちは、別々の固体だった。それがどうして、こうなったのだろう。彼女の殻を、私は破壊できない。だから、だれか、どうか。願いながら、暗闇の夜へ足を踏み出した。

駅で待ち合わせをした私と彼は電車に乗った。彼が先に、部屋を借りておいてくれていた、2DK。二人だけの部屋。私は彼に守られ、彼を守ろうと決意した。

それからたった、十ヶ月。彼は、飛び降り自殺でも、電車の前に飛び出したわけでもなく、死んでしまった。仕事の帰りに歩道を歩いていて、飲酒運転の車に轢かれた。即死だった。私は、母親をなくしたときの彼のように、空っぽになってしまった。彼の部屋からは、投函されることのない私の実家への手紙が見つかった。何度も、何度も、書き直した、手紙。謝罪の言葉。姿子を許してほしいという言葉。引き出しいっぱい、ちぎられた白い紙。

それから、私は一人では広すぎるその部屋に、何をすともなく住んでいた。働かず、遊ばず。墮落していく生活。どんどん自分が人間の道から離れていくように感じた。玄関のドアの脇につけられた表札は、彼の苗字のままにしていた。私たちは、籍を入れていなかった。彼が頑なに、拒否したからだ。彼が死んでしまって初めて、その理由を知った。彼はやはり私の両親に許して欲しいと考えていたのを。私が早く気付いて、一緒に実家に行って、謝って。そしたら、もしかしたら、許してくれたかもしれない。そしたら。もしかしたら。彼は死ななかったかもしれない。

そんな後悔が渦巻くように溢れ返った。苦しかった。悔しかった。

私の苗字は、秋吉のまま。でも、この部屋にいれば、彼の苗字でいられる気がして、離れられなかった。けれどこうして、こんな形で、実家に戻る事となった。彼の名で借りた部屋は、まだ残したまま。思い出がありすぎて、たった一年たらずの二人の日々を捨てることができなくて、私はまだ部屋に戻るつもりでいた。

「姿子」

涙混じりに、母が私を呼ぶ。私は隣にある母の部屋へ行き、枕元に座った。手をぎゅっと握り、そっと囁く。

「私はここ」

「姿子、姿子よね？ ここにいるのね？」

「ここにいる。大丈夫」

一年前に私を見失って、そして今度は七海が死んでしまった。母はもうこれ以上傷ついたら、壊れてしまいそうだった。

こんな母を置いて、私は、どこへ行くつもりなのだろう。2DKから持ってきたトランクの中身は鞆へ移され、しっかり閉じられていた。

母が眠ると、私は父と話をした。七海は、なぜ、死んだのか。警察や、マスコミから知らされた言葉たち。

七海が見つかった千里町は、この実家と県を違えている。そんなところに、なぜいたのか。なぜ、家を出たのかすら分かっていない。そんな中、目撃情報があった。それは多数で、あまり当てにならないと警察にも言われたらしいが、若い男と二人でいた、というものが多かったそう。

死因はおそらく刺されたことによる失血。その後、何者かによって七海は暴行されたそうだった。体液などが残されていないことから、計画的な犯行と警察に言われたそう。

私は、翌朝早く、財布と携帯電話、そして家族写真が入った鞆を抱え、家を出た。自分の部屋だったところに、一年の間住んでいた部屋へ戻ると書置きをしてきた。母は、また泣くのだろうか。私のために泣いてくれるだろうか、残酷ながら、泣いてくれなかったのならば少し寂しいと思った。

駅まで、バスで十分。そこから電車で二十分。乗りついで、一時間弱。千里町の、七海が発見されたあたりへついた。そこにはちらほらと、マスコミらしき人間がうろついていた。千里町は片田舎で、ぎらぎらとした目をした人間はとても浮いている。

私はおそらく、全国に顔を流されてしまっているのだから、マスコミにまぎれられるようメガネをかけた。七海が発見されたのは、見通しの悪い林の中だった。そこにはやはり黒いレンズを持った記者がおり、私は諦めてあたりをうろついた。

「...あの、すみません」

寂れた商店街の魚屋に話しかけると、少し迷惑そうな顔をされた。記者か何かと思われたのだろう。

「わたし、...秋吉、姿子といいます」

メガネを外すと店主は私の顔を見た覚えがあったらしく、驚いて「ああ」と声を上げた。

「あの...わたしの妹の七海のことなのですが、このあたりで見かけたとか、聞いたことはありませんか？」

「残念だけど、ないね。あの娘のお姉さんだよな？残念だったね」

「ええ...ありがとうございます」

頭を下げ、立ち去ろうとすると店主は私を呼び止めた。

「他の人にもそうやって聞いていく気？ 大変だと思うよ」

「そうですね。でも、私にできることってないですけど、それでも何か知りたいんです」

店主は痛ましいとでもいうような、自分が身内を亡くしたかのような顔をして頷き、頑張って、とってくれた。

けれど、どうしたらいいのだろう。

彼の言うとおりで。私にできることなど、ないのだ。警察が調べた跡を追ったって、もう何も出て来るわけではない。わざわざ千里町まで来ても、なにも見つかるわけではない。

ふらふらと歩くうち、知らない道へ出てしまったらしい。駅のある方向が分からないまま、海岸にたどり着いた。私は一休みしようと、砂浜にある岩に腰を下ろした。いつも誰かが座っていたかのように、まるで使い込まれた椅子のような、しっくりと丸くくぼんだ岩だった。

そのままぼうっとしていると、波打ち際に一人の少年が座っているのを見つけた。高校生くらいだろうか。七海より、少し年上だろう。腰の辺りまで濡れて何をしているのだろうとみつめると、彼が右足をきゅっと握っているのに気がついた。あ、と小さく叫んでしまった。私は鞆からハンカチを出し、彼に駆け寄った。足から血が出ている。

「大丈夫？」

ふ、と顔を上げた少年の顔を見て、私は息を飲んだ。それはとても美しい少年だった。少女のよう、というのとは少し違うけれど、中性的というか、まるで少女と少年の間ならばこのような顔だろうという美しさだった。冬だというのに海水に濡れた服の上から、少年のものだと分かる脚の筋張った線が見てとれた。

「痛い」

顔をしかめたまま呟いた少年。小さく、柔らかい声だった。

「あの、よかったらこれ使って」

「ありがとう」

彼はどうやら、岩場で引っかいて怪我をしてしまったらしい。くるぶしの辺りから血が滲んで、海に流れて消えていく。私はその足にそっと触れ、きつめにハンカチを巻いた。自分でさせてもかまわなかったのに、なぜだか彼がそうすることを望んでいるように感じた。

出血の量は、たいしたことはなかった。けれど少年は、とても大きな怪我をしたように痛がっていた。...そう、なのだ。これが、人。小さくひっかいた傷が、とても痛い。七海が死んでも、世界は変わらないマスコミの人々。それでも、自分の家族が殺されれば痛いのだろう。痛みは、分かり合えない。

「歩ける？」

「うん。でもまだ座っている」

「なら、あっちの岩に」

先ほどまで自分が座っていた、椅子のような岩に彼を連れて行き、座らせた。

「ありがとう」

少年は、一つ一つの言葉をゆっくりと、大切そうに発した。「ありがとう」という言葉が、私の中に染み込むように感じた。心地よかった。とても、居心地が良かった。こんな風に思ったのは、何年ぶりだろう。幼いころに忘れてしまった気がする。あの人と二人だけの生活でも、七海とのあのぎすぎすしたころでもない、もっとずっと前に、一度味わった気がする。美しい世界、そう感じられる、感覚。

どれほどの時間そうしていただろう。少年は岩に座り、私はその前にしゃがんで少年のくるぶしに手を当てていた。私ははっと我に返り、顔を上げた。

「家はどこ？ 近い？ 服、濡れているけど、大丈夫？」

「ひとり暮らしだから、濡れていても大丈夫です」

「お大事に」

そう笑いかけ、私は鞆を持つと立ち上がった。その腕をぎゅ、と少年が掴んだ。意外にも強い力に私が驚き振り向くと、彼は微笑した。

「ハンカチのお礼させてください。僕、痛いのがダメだから、すごく助かりました。あ、電話番号だけ、教えてくださいませんか？」

「ええ...と、分かった」

私は携帯電話を出し、彼の顔を見た。

「メモは持っている？」

「090、」

彼は自分の電話番号を暗唱し始めた。私は携帯にそれを打ち込んだ。

「鳴らしておいてください。電話します」

「分かった」

少年の番号にワンコールし、私は携帯をしまった。

「お大事にね」

「もうお帰りになるんですか？」

少年はなぜか、すこし寂しそうな顔をした。子犬のような、という表現がよく似合う表情だった。

「ええ。このあたりには...いえ、なんでも」

「知っています。秋吉姿子さん」

ああ。

メガネ越しとはいえ、少年にはしっかり私の顔は分かったらしい。七海の姉だと。彼が私の顔を知っているのが、少し意外だった。微笑んで彼は、駅まで送ってくれると言った。道に迷っていた私には嬉しい申し出だった。それだけでハンカチの礼に値する、と笑いながら言うと、少年も笑顔を返してくれた。ぞく、と身震いがするほど美しい笑顔だった。

駅の改札で彼と別れ、ホームで本数がとても少ない電車を待ってベンチに座る。岩のほうがり心地がいいくらい、硬いプラスチックの椅子。背もたれの部分に宣伝が印刷されている。最近は見かけなくなったそれを、なんだか懐かしくなって眺めた。暫くして、駅員が私に近寄ってきた。

「あの、弟さんから伝言です」

弟？

首をかしげるうちに、駅員はメモを読み上げた。

「`またすぐに合えると思います、電話します、だそうです」

「...ありがとうございます」

先ほどの少年だろう。またすぐに、と言うのはどういう意味なのだろう。そんなことを目の前の駅員に問うても分かるはずもないので、もうひとつの疑問のほうを聞いた。

「弟、と彼が言ったのですか？ 綺麗な顔をした、少年」

「ええ。十七、八くらいの。お姉さんそっくりの綺麗な子」

綺麗な。

そのように形容されることが最近少なくなったので、私はもう綺麗ではなくなったのだと思っていた。駅員の背中を見送り、ホームに滑り込んできた電車に乗り込む。電車の中は、都会の冷たそうな車体のそれとは違い、空気が柔らかかった。トンネルを通るときに、自分の背後の窓に自分の顔を映してみた。ああ、と、小さな声を上げて納得してしまった。向かいに座る中年の女性がその声に反応して顔を上げた。私は俯いた。この顔。そうだ、いつも長い髪で覆われていた、隠していたこの顔。昔はあまり、好きでなかった。見知らぬ人に声をかけられたり、どうでもいい会話が長引く。みんな、美しいからという理由だった。そうだ、私は美しかった。今も美しいようだった。中性的な、うつろな目。温度のないかんばせ。それは、先ほどの少年そのものだった。確かに、きょうだいと言えるくらいには、似通っていた。

私は電車を降りた駅の近くにあるホテルにチェックインした。予約していなかったため、満室に近かったらしいその受付はため息をついたそうだったが、メガネを外して見せると私が秋吉七海の姉と分かったようで、それを飲み込みすぐに部屋を用意してくれた。

砂を噛んだヒールを脱ぎ捨て、ベッドに倒れこんだ。ふんわりと空気の入ったそれを、鉛のように重い体がぎゅっと押しつぶす。暫く起き上がれそうにない。七海の死を知ってから、ろくに眠れていなかった。でもなぜだか、今は眠れそうな気がする。そんなことを考えているうちに、私は眠ってしまったようだった。

私は、電車の中にいた。先ほど乗った、あの暖かい電車。がたん、がたん。自分の体が揺れるのが心地良い。目をつむって揺れに体を任せる。がたん、がたん。と、突然ブレーキで電車が止まり、隣にいた人にぶつかった。

「痛いよ」

悲痛な声を上げたのは七海だった。顔は見えないけれど、そうだと分かった。私はつり革から手を離し、後ずさる。俯いていた顔がゆっくりこちらを向く。怖い。怖い。怖い、怖い、私は顔を両手で覆う。

「嫌」

こっちを見ないで。責めないで。私は悪くない。七海が一人でもやっていけるようになって欲しかっただけなのに。私とあなたは、別々の人間なの、なのに、どうして私を責めるの？

「ななみ——」

目を開くと見慣れない天井が遠くにあった。ああ、夢だ。私はほっとため息をついた。息が上がっていた。

起き上がって頭を軽く振り、夢の不快感を追い払おうとしたが、ダメだった。顔を洗おう。このところ久々に化粧をして、少し顔の皮膚が慣れてくれない。べたべたする感じがまた不快だった。洗面所の電気を点けると、鏡に自分の顔が映った。

七海。

七海は。七海は、どんな顔をしていただろうか。十歳を過ぎたあたりから、私の真似をし始めて。同じ髪型、同じブランドの服。背が伸びて、私とそっくりな体型になってからは、私の服を着ることも良くあった。だんだん化粧のせいもあってか顔つきも似てきた。目に生気のないところも、そっくりだった。この鏡に映った私の顔は、七海なのではないか、七海の顔といえるのではないか。恐ろしかった。数年したら七海はこの顔になっただろうか。私に七海が似ているのではなく。私と七海が似ていると、両親も世間も思っていた。ならば、七海がいれば私は必要なかったのではないか、だって、私はこんなにも不器用で陰鬱とした性格で、七海とは正反対で。きっと七海なら親を捨てて駆け落ちなんてしなくて。

...馬鹿な事を考えた。私は蛇口に手を伸ばし、水を出した。冷たい水で顔を洗って、化粧を落とした。ホテルのタオルで顔を包む。ふんわりと、いい香りがする。顔を隠した私を、今誰かが覗き込んでいるのではという妄想に取り付かれそうになった。...まるで、怖い映画を見たあとみたいだ。私はタオルをそっと取り去った。ほら、何も無い。誰も、いない。

服を脱ぎ捨て、ベッドに入って布団を被った。携帯を見ると、昼間にかけてた少年の番号からの着信履歴があった。かけなおそうと思ったが、もう夜も遅かったのでやめておいた。

「またすぐに会えると思います、」

あれはなんだったのだろう。私は鞆から、頭痛薬を取り出した。二錠ほど口にいれ、飲み込む。頭痛がしているわけではないが、私はこうすると悪夢を見ず眠れる。体に悪いと、あのひとに言われてからはあまりしなくなりましたが、彼が死んでしまっただけからはたびたび飲んでた。その晩もやはり、薬のおかげでぐっすり眠った。悪夢は、見なかった。

ホテルに滞在して、一日が経った。二日分はホテルに支払っており、私のことを気遣ってくれてか何も言っはこなかったが、手持ちはそんなに多くなかった。私はこの先どうしよう、と考えた。実家を出たときには何も考えていなかった、千里町に行きさえすれば何か分かると信じて疑わなかった。書置きのとおり、あの2DKへ戻ろうか。

しかし、少年が気がかりだった。あの翌日、彼の携帯電話に留守電を一本入れた。出られなくて申し訳なかった、と。それから、音沙汰がない。お礼というのも口先だけのものだったのかとも考えたが、どうしても、ここから離れて、彼に会うのに何時間もかかるあの部屋へ戻る気にはなれなかった。といっても、三つ四つ下の少年に思いを寄せたりと言うことはなかった。私は、ずっと死んだあのひとを忘れていなかったし、私にそっくりなうつろな目の少年にそのような感情を抱くことはできそうになかった。

二日間、部屋でぼうっとしていた。食事は、一日二回だけ、ルームサービスで摂った。人の目が少し怖かった。その中からうつろなあの目が覗くような気がした。

あまりに暇だったので、私は昼間からバスタブに湯をため、そこにつかることにした。ひとりになってからシャワーで済ませていたので、眠ってしまいそうに気持ちよかった。

湯船でついまどろんでいたとき、脱衣所に置いた携帯電話が鳴るのに気付いた。好きでもない、タイトルも忘れたクラシックの着信メロディ。私は湯から出て、それをとった。少年からだった。

「もしもし」

「こんにちは。姿子さん？」

なれなれしく姿子さん、と名前と呼ばれても、不快感はなかった。それがいかにも当たり前といったように少年はそう呼んだ。

「ええ。こんにちは、...名前を知らないわ」

「隼人。宮城隼人」

「ハヤト...くん」

「姿子さん、テレビとか見てる？」

「見てないわ」

「ニュースになってますよ。姿子さん。行方不明だって」

私は焦って、タオルを掴み、部屋に戻るとテレビを点けた。ピ、ピ、とチャンネルを変えても、ニュースは放送されていない。まだ、ワイドショーの流れる時間帯ではないからだろうか。

「さっきやってたんです。後追い自殺するんじゃないかって」

「...ほんと？ ...家に連絡しなくちゃ」

「ねえ、お礼いつさせてくれますか？ハンカチ買ったんです。デパートで。恥ずかしかったんだけど、無駄にしませんよね」

「ええ、そうね。ふふ」

美しい彼が、婦人小物売り場で恥ずかしそうにハンカチを買うところを想像し、つい笑ってしまった。

「今、ホテルにいるの」

今いる駅のホテルの名を言うと、隼人はああ、とすぐに分かったようだった。

「ハンカチは今度渡しに行きます。それより早く、生きてるって教えてあげたほうがいいんじゃないですか」

「両親に？」

「はい。あと、警察にも」

「ありがとう。じゃあ、また今度」

通話を切り、服を着込んでカーテンの隙間から外を見た。大きなカメラが一台。もうホテルまでわかるなんて...と少し驚いていたら、部屋の電話が鳴った。フロントからだった。それに出ると、私の両親からの電話をつなぐということらしかった。駆け落ちをしてから、両親に電話の番号を教えておらず、今回実家に戻った際も伝えなかったことを思い出した。もう二十を過ぎた娘なのだけど、と一瞬思ったが、そんな偉そうな事を言える身分でもなければ、馬鹿娘であれど母の苦しみを分からないほどの馬鹿でもなかった。

そんなわけで、父によって説得され私は情けなく実家に戻った。駆け落ちしたあのころなら、電話の向こうで母が泣き崩れていようが構わなかっただろうが、今はそんなことはできなかった。

電車で二十分。地元の駅に着き、待っていた父の車に乗り込むと、母は私を抱きしめた、痛かったけれど、母の痛みを想像するだけでももっと、痛かった。

「お母さん、ごめん」

「姿子...よかった...姿子」

ぎゅうっと強く強く抱きしめられる。その暖かさは、私には、相応しくなくて、勿体無くてなんだか居心地が悪かった。

お母さん、ごめんなさい。親不孝な娘で、ごめんなさい。 私は母の背に腕を回し、抱きしめ返した。

七海が死んで、一週間ほど経った。世間はもう、私の妹のことを忘れていたようだった。ワイドショーでは異国のストライキの様子がそれに変わって流されていた。

少年からの連絡はというと、また無くなった。私には彼が何を考えているのか、全く分からなかった。ハンカチを渡して、それで終わりにすればいいのに。それとも、妹を殺された私に興味でも持ったのだろうか。

私が実家でだらだらとした生活を送っていたある日、昼過ぎになって布団から出て両親のいる居間へ行くと、二人はテレビを見ていた。様子が、少しおかしい。私が居間に入ったことにも気付かないくらい、じっとテレビを見つめている。私は挨拶もせず、同じように座布団に腰を下ろし、テレビから流れる映像と深刻そうなアナウンサーの声を聞いた。

「——繰り返します。遺体で見つかった男性は今月初め、千里町で見つかった秋吉七海さんの写真所持しており——」

えっ、と小さく叫ぶ。全く見たことのない、名を聞いたこともない男性が、七海の写真。どうして。

「姿子」

やっと父が私に気付く。

「朝刑事さんが来た。この遺体は千里町の刑事だそうだ」

刑事。七海の事件に関わっていたのだろうか？

「七海と姿子が二人で写った写真を持っていた」

七海にねだられ、二人で遊園地に行ったときに撮った写真だった。高校生になったばかりの私と、私に似てきた七海。姉妹以外には見えない、私たち。

どうして。七海は、その男に殺されたのだろうか。私は写真の中の七海を見つめた。

七海、あなたは どうしてこんなことになったの。何をしていたの。

私が混乱している最中に、部屋から携帯電話の鳴る音がした。私はふらりと立ち上がり、部屋に戻った。携帯には、090から始まる番号。まだ名前を登録していなかった少年、宮城隼人からのようだ。

「はい」

私の声は老婆のようだった。きっと、隼人もあの報道を見たのだろう。

「もしもし、姿子さん、大丈夫？」

「...ありがとう」

一人前の男性のように私を心配する少年。なんだか笑ってしまう。彼の優しさになのか、私の情けなさになのかは自分でもよくはわからない。

「姿子さん、今実家ですか？」

「うん。今、ニュース見たわ」

「...そうですか。こんな時ですけど...いつ、お暇ですか？ 例の...ハンカチを」

「いつも暇よ、働いていないし」

「今日...は、だめですか」

「いいけど。ただ、今いる実家から千里町まで一時間半、かかるけれど」

「分かりました。夕方にしましょう。五時に、駅でどうですか？」

「そうね」

礼をもらうために、一時間半かけて彼の地元まで出かけていくというのも変な話だと思ったけれども、私は彼ともう一度話をしたかった。否、あの美しさの中にある、暗い目を見たかった。私に良く似たあのかんばせを。

通話を終了させると私はトランクから出した地味な服に着替え、薄く化粧をすると、まだ時間に余裕があったので七海の部屋に向かった。この家に帰って来てから、そこには一度も入っていなかった。七海の、亡霊がいるような気がして。どうしてそんなにも妹を恐れているのだろうかと少しおかしくなる。けれど私は、恐ろしいくらい自分を慕い、寄りかかっていた彼女の元から、一瞬で消えてしまったのだ。支えをなくした彼女がどうなったか、両親は話さなかった。けれど、最後に七海の体を見たときに、左手首にあった、治りきっていない大きな傷跡に、私は取り付かれていた。私のせいで。私のせいで自ら命を絶とうとした。きっと、そうなのだろう。

だから、七海は私を責めていると感じるのだ。きっと、殺されなくても七海は死んでいた。自らを殺していた。私を責めるために。私を苦しめるために。

なぜ置いていったの、なぜ見放したの。そう聞こえる気がした。しかし、カチャリと七海の部屋の扉を開け、そこに入っても、何もなかった。一年前とまったく変わらない、私の部屋に良く似たそっけない部屋。そこには暗い感情は見て取れなかった。私はその部屋から、写真立てを探した。そこに、七海はいつも、遊園地で取ったあの写真を入れていた。

写真立ては、見つかった。しかし、写真はそこに、なかった。空っぽの写真立て。中身のない、役目を果たせないそれ。

男が持っていた写真が、ここにはまっていた物だとしたら。わざわざ外して、七海はそれを持って、行方不明になったのだとしたら。自ら失踪したのなら。

だとしたら？ だとしたら、何だろう。...わからない。

ポーン、と時計が鳴る。三つ。午後三時だ。私は我に返り、写真立てをもとあった本棚へ戻すと、家を出た。少し早かったが、また七海のことばかり考えてしまいそうで怖かった。もしかしたら、私は少年と一緒にいることで七海を忘れたいのかもしれない。七海の亡霊などいない、そう思いたいなのかもしれない。帽子を深くかぶった私は、マフラーで口元も隠し、バスに乗った。2DKの彼の本棚から持ってきた本を開き、その文字列に目を走らせた。

——生きることで、罪を償う。苦しくても人生を送っていく。

そんな書き出しだった。嫌な言葉だ。まるで、私のことのように。否、生きるだけで償えるだろうか？ 七海を死なせてしまった罪を、償えるだろうか？ 七海の死の真実が知りたい反面、私が殺したのと同じ意味を持ってしまうのではないか、それがとても怖かった。

バスを降り、電車に乗り換え、本の続きを読んだ。身内を殺した少女の話だった。二十ページほど読んで、私はそれを閉じた。電車酔いか、小説の内容のせいか、少し吐き気がした。千里町につくまで、目をつむって電車に揺られていた。車内に降車駅を告げるアナウンスが流れ、私は立ち上がった。電車を降りる。携帯電話を取り出し、待ち受け画面で時間を確認する。まだ少し早かった。改札を出て、時間をつぶせるところを探す。道の向こう側にチェーンのコーヒーショップがあった。そこへ向かおうとすると、駅員が駆け寄ってきた。

「お姉さん」

「え？」

見ると、先日ここに来たとき、私と少年を兄弟と勘違いしたあの駅員だった。

「弟さん、もう来てますよ。向こうに」

駅員が指差す先には、この間とは打って変わって暖かそうな服に身を包んだ宮城隼人がいた。

私は駅員に礼を言い、彼に近づいた。

「隼人君」

「あ、姿子さん。こんにちは」

「こんにちは。待たせたようで、ごめんなさい」

「早く来てしまっただけですから。まだ時間じゃないし」

隼人は座っていた花壇を囲む煉瓦から腰を上げた。私より少し背が高い彼を見上げる。彼はにこりと笑い、私の右手をとった。

「海岸行こう、姿子さん」

「え、海岸？　　というか、手、恥ずかしいのだけど...」

「気にしないで」

気にする、と思いながら、仕方なく隼人に引っ張られていく。彼の手は力強くて、離してもらえそうになかった。

「姿子さんのこと、テレビでいろいろ聞きましたよ」

「そうなの？　　プライバシーとか...ないのかしらね」

「被害者の美しい姉。七海さんより注目されてるんじゃないですか」

何だか、わざと私の嫌がることを言うような言い方だった。隼人は私の前を歩いていて、表情は見えない。

「嬉しくないわ」

「そうですか。それから、あなたの恋人のことも」

「...そんなこと、まで...」

世間の好奇の目に、私とあの人の二人のことが汚されている。あの短かった生活が。そう感じた。隼人はそれで更に、私の心を抉ってくる。

「あなたの恋人も、死んでしまったんですね」

「そうよ。交通事故で」

「辛かった？　　恋人が死んで、泣きましたか？　　自分も死にたくなかった？」

「...なった。どうして、って思った。私がいなかったらきっと、彼は他の人と、結婚して、死な

なかったかもしれない。私じゃなきゃ駄目な理由も見つからなかった。一緒に死んだのならこんなに苦しくなかったらうとも思ったわ」

「そうですか。...よかったです。うらやましい」

ふ、と少し振り返って、隼人は私に笑いかけた。

「え？」

「寒いですね」

海岸の近くまで来て、隼人は足を止めた。

よかったです。

うらやましい。

その言葉が、何に対してなのか。私には分からなかった。恐る恐る、「よかったって、何が？」と聞いた。本当に、恐る、恐る。恐れながら、答えが、怖いと思いながら。

「あなたの恋人は、あなたの中に強く残ってるんでしょう？ 痛いくらいに。消えない、癒えない傷跡になって。それはとても、うらやましいことなんです」

私は、それ以上何も言えなかった。そう、彼の死は傷跡。いっしょに過ごした短いあの生活すら、痛むくらいに。

どうしてこの少年はそれが分かるのだろう。誰かを、なくしたのだろうか。

「姿子さん。ついでなので、今日はほんとお茶を、どうですか？ 駅前のコーヒーショップですけど」

「あ...。そうね。いきましようか」

私は隼人の後ろをついて、彼のあとをついていった。ゆっくりと歩く、彼の背中をぼうっと眺める。彼の意図が分からない。彼は、なんなのだろう。妹を亡くした私の前に、なぜ現れたのだろう。彼は何者なのだろう。俯いて、歩いていた。周りが見えて、いなかった。

「姿子さん！」

少年の叫び声がして、顔を上げる。私は横断歩道の上にあった。大きな音がして、トラックがブレーキ音を鳴らしながら近づいてきていた。

とっさに、私は体を転がした。どう動いたのか自分でも分からない。気がつけば、歩道に倒れていた。トラックは少し先で、停止していた。隼人が私の腕を掴んで抱き起こした。

「姿子さん、大丈夫ですか」

「え、ええ...」

声が震えて、息が上がっている。トラックの運転手が降りてきて、私に声をかけた。大丈夫ですか。私はまた、ええと答えた。

それよりも、ねえ、見えないの？ そこにいる、私の妹。

七海がこちらをみてる。根の国から私を呼んでいる。

お姉ちゃん。

そう、呼んでいる。

そうでしょう、七海。

七海。

「姿子さん！」

大きな声に、私は振り向き隼人を見る。暗い色の目が見開かれて私を見つめていた。

「...ごめんなさい。大丈夫」

「家まで送ります、心配だから...電車とバスで、大丈夫ですか？ 近所の人に、車を出してもらったほうがいいですか」

「いいえ。怪我もしていないし、親が心配してしまうから」

「血が出てる」

転がったときに地面ですりむいたようだ。手の甲と左足に小さなかすり傷があった。

「これくらいなんでもないわ」

私と隼人は、トラックの運転手の申し出で、駅まで送って貰った。そこから、隼人と一緒に電車に乗った。彼はおかしなほどに私を心配した。大丈夫、と何度も繰り返した。彼を落ち着かせるために、私は笑った。「大丈夫」。

彼は私の地元の駅まで来て、私をタクシーに乗せた。

「本当に、大丈夫ですよ？」

「ええ」

心配そうな隼人が、可愛らしく思えて、私は笑った。

「これ、良かったらあげるわ」

——生きることで、罪を償う。苦しくても人生を送っていく。

行きの電車とバスで読んでいた本を、隼人に差し出した。

「何ですか？」

「いない本。読んだら分かるわ。私は読みたくない本」

「そうですか。...お大事に」

「ありがとう」

バタンと扉を閉め、すっと滑り出す黒い車。隼人が手を振った。私も振り返した。

七海の亡霊。千里町で出会った、そこで死んだ少女の亡霊。

疲れているだけよ。あの人が死んで、七海が死んで。疲れているだけ。そう自分に繰り返し言い聞かせた。大丈夫、私は、大丈夫。

家の手前で車を止めてもらい、テレビカメラなんて一台もなくなった家の門を開けた。カタン、と言う音に、庭で椿の花を切っていた父がこちらを向く。おかえり。私はただいま、と返す。

「綺麗な紅色」

「玄関に飾っておいてくれ」

私は父の手から椿を受け取り玄関に入ると、ただいま、と家の中に声をかけ、一輪挿しを持って台所へ向かった。母が夕食の支度をしている横で一輪挿しに水をいれ、椿を挿した。

「綺麗な椿ね」

にこりと笑う母。少し、落ち着いてきたようだ。良かった。けれど、母は七海を忘れていない。これからも、絶対に忘れない。この傷跡を。

部屋に戻り、コートと帽子、マフラーを取って、部屋の隅に座る。

手の甲の傷跡を少し消毒し、何枚か絆創膏を張ったが、なんだか少しわざとらしく見えてすぐにはがした。

実家に戻って来てから夕食を三人で食べていると、違和感を覚えざるを得なかった。この間まで私は一人で、その前はあのひとと二人で。駆け落ちする前は、私と母の間に、七海が座っていた。三人だと、四角いテーブルの一辺が余って、それがとても、不恰好に思えた。

「姿子、手、どうしたの？」

私の手の甲の傷を見て、母が聞いた。

「すこし転んだの」

「あら、大丈夫だったの？ ほかに怪我は？」

「大丈夫よ」

手をひらひらと振って笑って見せると、母もそう、と言って笑った。父は、あまり心配かけるなよ、と言った。

実家に戻ってきてすっかり早寝遅起きという生活になってしまった私は化粧を落として部屋に戻り、布団に横たわった。鞆の中にちかちかと光るものがあるのを見つけ、携帯を取り出すと、着信履歴があった。私に電話をしてくる人間なんて、隼人以外にはいない。留守電を選択し、それを聞く。

怪我は大丈夫か、家にちゃんと帰れたか、と、まるで私の母親のように心配してくれていた。私は隼人に電話を返すことにした。

「姿子さん！ 今家ですか？」

電話に出るなりそう叫ぶ隼人にまた、笑いがこぼれる。

「ええ。ありがとう、心配してくれて」

「よかった。僕と一緒にいながら怪我をさせて本当にごめんなさい」

「ねえ、それより隼人君、自分の話しないじゃない。たまには私の話ばかりじゃなくそっちのことも聞かせてくれてもいいんじゃない」

「そうですね」

隼人は少し驚いたようだった。私自身も少し驚いていた。少し前まで、見知らぬ少年だった彼が、今は本当に弟のように可愛く思えた。あのひとが死んでから、人に対する興味を忘れていたのに。とても、不思議で、けれど当然な気もする。だって、私たちはそっくりなのだから。

「...僕、妹がいたんです」

「妹？」

布団から体を起こし、毛布に包まって筆筒に寄りかかる。

「死んでしまったんですけど。生まれることなく」

「...？」

「母の胎内で、死にました」

流産。

胸の下がざわりとした。

「生まれることなく死んだ命。これって、何の意味があったと思いますか？」

私とよく似た固体。その命に、何の意味があった？

「母は絶望した。娘をととても欲しがってたんです。僕も妹を待っていた。でも死んでしまったんです。それから、母も飛び降りました」

「え？」

「生まれずに死んでいった命の意味がわからない、って、母は幼い僕に何度も言いました。毎日泣いていた。そして、ある日飛び降りた」

私は何もいえなかった。「呪われた魂」。彼がそう呟いた。私と、彼、そして、七海の暗い瞳。呪われた、魂ゆえの。

「姿子さん。死んだら何もなくなるのかな。怖いんだ。けど、母親の胎内に還りたいとも思う。居心地がよかった、この世界のどこよりも」

「居心地が...？」

「テレビとかで聞いたことない？母親の胎内の記憶を持っている、っていう子供。皆すぐ忘れてしまうんだけど、稀に覚えている子供がいたりして。僕はまだ、覚えてる。ドクン、ドクン、っていう、母の鼓動。それから僕を待っている母の声、それから...。この世界は、生き辛いね、姿子さん」

胎内の記憶。鼓動と、母の声。私は覚えていないけれど、なんとなく想像できた。大きな、暖かな、鼓動の音。遠くから聞こえるような、うすい膜につつまれたようにやわらかく聞こえる、母の語りかける声。とても居心地の良い、しあわせそのもののような場所。

「そうね、生き辛い」

私を責める七海の亡霊。優しくなんてない世界。誰に謝っても自分自身を許しきれない私。

「姿子さん。また、話、したいです」

「わたしも」

その後が続けられなかった。ぽろぽろと、涙がこぼれてきてしまった。隼人と話していると、許されたように感じられる。許されては、いけないのに。

「ハンカチ、また渡せなかった。何ででしょうね。でも、また会えるなら嬉しいです。今度は、僕がそっちに行きます」

ありがとう、と、言おうとした。でも出てきたのは情けない涙声で、でも、隼人には分かったようで、少し笑って「どういたしまして」と答えた。

その夜、私はまた悪夢で目が覚めた。やはり、七海が私を追ってくる夢だった。

お姉ちゃん、待って。

いかないで。

駆け落ちなんてしないで。

おいていかないで。

泣きそうな顔の七海が、私にすがり付いて叫んでいた。

目が覚めた私は、泣いていた。

違うよ、七海。置いていかれたのは私のほうじゃない。この残酷な世界にあなたは、傷と一緒に

に私を置いていったんじゃない。

そんな風に思うのは、傲慢だろうか。

鞆から頭痛薬を出し、一錠口に含んだ。そのまま、朝まで眠った。

姉の姿子が携帯電話を買ったのは、彼女が高校二年のときだった。十七歳。だから、私が十二歳の頃。姉の真似をし始めて、二年が経った頃のこと。

姉は周りの高校生に比べて、そういったものに興味がなかった。私の周りの小学六年生ですら、携帯を持ってる子はいた。姉は携帯を買ってもらった状態のまま使っていた。着信音を流行の音楽に変えたり、待ち受け画面をいじったりもしなかった。時々、ピリリリ、とそっけない音が鳴っていた。私はこっそり、姉がお風呂に入っているときに携帯をチェックしていた。姉には沢山友達がいるようで、何十人もの番号とアドレスが登録されていた。男の名前はほとんどなかったけれど、私は姉に男と仲良くして欲しくなかった。本当は女友達すら私の美しい姉には必要ないと思っていたけど。私は、男の電話番号とアドレスを削除した。また同じ名前が入ったとしても、また消してやる。そう思っていた。

「お姉ちゃん」

十二歳と十七歳。この頃はまだ、姉は私に優しくて柔らかい笑顔を向けてくれていた。私にだけ、実の妹の私にだけ向けられる、特別な顔。

「なあに、七海」

「お姉ちゃんの着メロ、変えようよ」

「...どうやるの？」

姉は携帯を少しいじり、首をかしげた。私はそれを受け取った。私は、携帯電話は持っていないけれど、機械に強かったのと、クラスメイトが持っているのを見せてもらったことがあったので、操作の仕方は姉よりは知っていた。買ったままの携帯には、数種類のコール音と、クラシック音楽のメロディが入っていた。私が知っている曲はなかった。何曲か流してみても、私はよくわからなかった。タイトルだけで決めて、電話とメールの着信音に設定した。

「何にしたの？」

「よく分からないけどかわいい曲」

「そう」

姉はあまり興味がなさそうだった。その曲を流して聞かせてみると、「聞いたことある」というので、曲名を知っているか尋ねてみた。

「曲名までは知らないわ。でも、かわいい曲」

「ねっ」

私は姉に携帯を返した。

それからずっと、姉はその携帯を使い続けていた。ずっと。着信音を変えることなく。

それは、姉に届くことのなかった、わたしの祈り。

クラシックのメロディで、目が覚めた。奏でているのは携帯電話だった。タイトルの分からない曲。

「...八時...」

こんな朝早くに、と呟きながら電話に出る。

「はい」

「姿子さん、寝てました？」

「寝てたわ。しっかりと。隼人君、クラシックは詳しい？」

「え？ いや、あんまり...。あの、昨日の今日で申し訳ないんですけど、今日ハンカチ渡しに行ってもいいですか」

「いいけれど。暇なの？ 高校生って、まだ春休みじゃないんじゃない？」

「高校生は冬休みもまだですよ姿子さん...。それに、僕は学生じゃないです。恥ずかしながら無職です」

「大丈夫よ、私も無職。一年もね」

そうして今日も隼人と会うこととなった。こんなに早起きするのは久々だ。両親が朝食を摂っている居間へいくと、やはり驚いた顔をされた。友人と約束があるのだとっておいた。友人がいるということにまた驚かれた。

待ち合わせは、私の地元の駅。今度こそハンカチを渡します、と言われた。でも、それでももう二度と会わなくなるということではなさそうだと感じた。

隼人から、不思議な、感情を感じ取った。隼人が私といて、安心に近い感情を持っているのを、感じる。それで私も安心する。でも、それは恋心とは違った。名前のつけられない、暖かい気持ち。

柄でもなく、私は昔着ていた服を着込んで駅へ向かった。ちょっとした若作りだ。隼人を少し驚かせたいという、若い女の子のような悪戯心。そう思って、私はまだ二十一だと気付いた。まだ、若いのだ。二十一で、恋人と妹を亡くし、一気に老け込んだように思った。

玄関を出ると、視界の端に紅い椿が映った。行ってきます、とそれに声をかけ、門を開いた。カン、カン、と五センチのヒールを鳴らして歩くのは、久々で、すこし気持ちが晴れる気分だった。

隼人との待ち合わせは、駅の改札だった。改札についてすぐ、隼人を見つけることができた。彼の姿は周りの人々から少し浮いているように映った。

「おはよう」

「おはよう姿子さん。なんか今日は服が派手だね」

「若作りしたのよ」

「若いのに？」

くすくすと笑う隼人に、私も照れ笑いを返した。彼は、今日は飾り気のない真っ黒な服に少し長めの髪をたらしていた。華奢な彼は、遠目で見れば、すらっとした少女のようだった。

「はい、とりあえず、忘れないうちにハンカチ。...じゃなくて、海でのお礼です。あの時はありがとう」

「いいえ、なんだかすみません」

「でも、姿子さんとかうやって仲良くなれてよかったから、本当に感謝してます」

「わたしも。...どうする？ 今度こそお茶しましょうか」

そして私たちは、私の行きつけだった、いつも人の少ないカフェに向かった。

一年前まで、私が良く通っていた場所だ。一年なんて月日とは関係なく、それは存在した。た
たずまいも、人の少なさも変わっていない。

店主は私の顔を見ると、少し驚いた顔をしたあと、何も言わず、奥の席へ通してくれた。少し
薄暗くて、とても落ち着く。

「いいお店だね」

「そうですね、私のお気に入り」

二人でコーヒーを頼み、私はチョコレートケーキも注文した。フォークで切り、口に運んでい
るとなぜかここにこと笑っている隼人と目が合った。

「姿さんもチョコレートケーキとか食べるんだね」

「何？ おかしい？」

「ううん。可愛い」

「年上に向かって失礼よ」

「ごめんなさい」

隼人のように美しい少年に可愛いといわれれば、どんな女の子もドキリとするものなのだろう
。しかし私は、そういうところに欠陥があるのか、笑ってそう返事をするだけだった。

二人で黙ってコーヒーを飲んでいると、私の携帯が鳴った。父からのメールだった。遅くなる
のか、と。母が心配するから、早く帰るように、と。

「メールですか？」

「ええ、父から。遅くなるなって」

「お父さん、ですか」

隼人は唇の端を少し上げて笑ったあと、

「乙女の祈り」

と呟いた。

「え？」

「今の曲のことなら。着信音」

「ああ...」

七海が昔、設定したままだった着信メロディ。古い携帯電話と、クラシックのメロディ。曲も
、タイトルも聞いたことがある。

「それにしても、古い携帯ですね」

「高校生のときに買ってもらったままなの」

「お父さん、に？」

「...ええ、そうね」

隼人はまた、唇だけで笑った。

「電話でね、言ったでしょ、母の胎内の記憶を持っているって」

コーヒーを少し飲んだ後、隼人は口を開いた。

「ええ。心地よかった、って」

「うん。でも、心地良いだけじゃなかった。...聞いてくれる？」

「...ええ」

隼人はもう一口コーヒーを口に含み、ゆっくり、言葉を紡ぎ始めた。

「...僕は、母親の胎内で、母の鼓動と、外からの声を聞いてた。母からもたらされるものは皆、心地よかった。でも、ただひとつだけ、嫌なことがあった。聞いてしまった。僕の父親が、母に向かって、僕を産むなって、言った」

口を閉じ、俯くと、またゆっくりと、そしてだんだんと早口になりながら続けた。

「それが、胎内で一番濃く覚えている記憶。産まれてからも覚えてた。意味は分からなかった。でも、母が妹を宿したころには、もう分かるようになってた。九歳だったから。それで、僕は父方の祖母に聞いたんだ。僕は、産まれない方がいいって、父が言っていたことはあるかって。そしたら、あっさり頷いたんだ。僕の胎内の記憶は、想像ではなかったって、それで分かった。ねえ、墮胎というのは、その命が小さければ人殺しじゃないんだよね。でも僕の父親は、人殺ししたってそれを気にも留めない人間だ、そう思った。九歳で、父親を心から嫌いになった。元から、暴力を振るわれたりして、好きじゃなかったけど。僕は...」

一気にそこまで言うと、隼人はカチャン、と音を立ててコーヒーカップを掴んだ。その手は小さく震えていた。私は涙が溢れそうになるのを、俯いてこらえた。

「僕は、父が母に暴力を振るうのを見た。仕事がうまくいなくてイライラして、母に熱湯のコーヒーが入ったカップを投げつけたりしていた」

私は右手を添えていたコーヒーカップを両手で包んだ。ずっと触れていると、熱くて手を離したくなる。そのまま話さずにいると、じくじくと痛んできた。...これを、投げつけられて。

暗い色の水面に、私が映る。暗い色をした私の姿が。

「そして、妹は死んだ。父のせいで。それは間違いないって、僕は思ってる」

実の父を憎む。その気持ちは私には分からなかった。優しい、椿の花を飾る私の父と、隼人の父親はあまりにもかけ離れていた。

「だから、僕は...だから、母は」

隼人はコーヒーカップをソーサーに戻した。滴がはねて、そこに落ちる。

「母は、飛び降りた。マンションの、ベランダから。七階だった。そして、死んでしまった」

そこまで話すと、隼人は俯いて、何も言わなくなった。

コーヒーから立つ湯気が、薄くなり、消えていく。空気に混じって、なくなっていく。

「鯉のぼりが」

ぽつりと、隼人が呟いた。

「鯉のぼりが、飾ってあったんだ。僕の、小さい、鯉のぼり。家に来たときに、祖母が、僕のために飾ってくれた。母が死んでも、まだ飾ってあった。六月になっても、まだ。それで、雨に鯉のぼりが濡れていた。僕は父に、鯉のぼりを外して欲しいといった。父はそのとき、機嫌が良かった」

私の目の前にいる少年は顔を上げた。まっすぐに私の瞳を見た。

「母が死んで、父は悲しまなかった。妹が死んだことも。許せない。人が死んだことを小さく考える人間が、僕はどうしても許せない。死んだ人間は冒瀆されてはいけない。そう思うんだ」
だから。

彼は両手で顔を覆った。

「鯉のぼりを外すために、ベランダの作に立った父を、」

ドクン、ドクン、と。

私の心臓が鳴った。

彼が胎内で聞いた、心地よい音ではない。

不吉を知らせるような、不安を煽るような音。

「僕が、突き落とす」

少年の告白は小さな声で、けれどもはっきりとしていた。

「僕が」

私には、彼の表情が見えなかった。隠された表情は、想像ができなかった。暗い、暗いものであるだろうとしか、想像できなかった。

「僕が殺した」

私はその告白に、何も答えられなかった。

冷たくなったコーヒーの入ったカップに人差し指で触れた。冷たくなった、人の体。冷たくなった、七海の体。大きな傷。怪我をした血液。岩場で引っかけた傷跡から血が、海へ流れていく。痛い、痛いと言げさに繰り返す少年。大丈夫、大丈夫と執拗に聞く少年。

「ゆるしてほしい。誰かに、許して欲しかった。でも、許されたら、父のことを僕は忘れるかもしれない。ただ、憎かった父としか考えなくなるかもしれない。殺してしまった父のことを。

でも、姿子さんだけ、僕を許して欲しいんです」

私はなんと答えていいか分からなかった。何も言えず。コーヒーカップから手を離した。隼人はそれを掴み、ぎゅっと握った。

「今まで、誰にも...？ 一人も、知らないの？」

「刑事に一人、僕が父を殺したことを知ってる人がいました。僕は呪われてる。それに彼は気付いた。そして、僕のことを黙っている。でも、そんな人はどうでもいい。いなくてよかった。

僕は、姿子さんだけ許してくれれば良いんです」

私は少年の手を握り返した。

「辛かったよね」

それしか言えなかった。いかにも薄っぺらく聞こえて、自己嫌悪した。けれど隼人は、一粒涙をこぼして「ありがとう」と言った。

それから感傷に浸った女の子のように泣き続けたあと、私たちはコーヒーをもう一杯注文し、それを飲んで店を出た。

「ちゃんと帰れる？」

「帰れますよ」

隼人が消えた後、私はそこに立ち尽くし、その意味を考えた。

答えは分かってる。

でも、そこまでの過程がうまくいかない。

答えが出せない。何かが思考の邪魔をするように。

だって。

どうして。

言うだけ言って逃げるのはずるいよ、隼人。

これじゃあなたを問い詰めることも責めることもできないじゃない。

私は、誰にもそれを言いたくなかった。聞き間違いならいいと思った。そうじゃない確信があったから、余計にそう思えた。そのまま家に帰って、紅椿の横を通って、玄関から家に上がった

。

母にも、父にも、言えない。私は七海の部屋へ行き、机の中や本棚を調べた。そこは大方警察が捜査していったこともあったのだろう、何も見つからなかった。

私が見つかるしかないのだ。

七海が死んだ理由。その犯人。それが宮城隼人であるのか。

隼人は、許して欲しいといった。父親を殺したことを許して欲しい。七海を、ではなかった。涙がまた、あふれてきた。緩くなってしまった涙腺は、糸が切れるように簡単に涙を零す。

信じていた隼人が七海を殺したということが悔しかったわけでも、悲しかったわけでもない。ただ、訳が分からなくて。そして、根の国から足を引っ張られるような感覚のせいで、泣いた。

私の分からないところで七海と接触した隼人が、私に近づいてきた理由が分からなかった。何も、浮かばなかった。

私が、宮城隼人を問いただす。

そして、警察へ連れて行こう。

七海、それで許してくれますか？ 宮城隼人を許した私を、あなたは許してくれますか？

私は、その日の夜、隼人に電話をかけた。

隼人と待ち合わせをしたのは、その日から一週間が経った日のことだった。家を出るとき、あの紅い椿が花びらを散らし、枯葉に混じって落ちていることにも私は気付かなかった。千里町の駅で、私たちは互いに見つめあった。私の行動を探るような隼人の目を見て、この間の言葉は聴き間違いではないと、思った。

「僕の家に行きましょう。人が多いところでは」

家に誘って私も殺すつもりではないかと思った。でも、もしそうでもいいと思った。七海の部屋の引き出しに、宮城隼人の名前と電話番号を書いて置いてきた。もし殺されたら、警察が見つけてくれる。宮城隼人と言う名が偽りでも、電話番号から彼を見つけてくれるだろう。「分かった」。私は頷いた。

私たちはタクシーに乗り、隼人は運転手に住所を伝えた。

早く彼と話をしたかった。何もかもを聞いてしまいたい。それが、嘘でも。私はまた、吐き気に襲われていた。

隼人の家は、庭が林のようになった一軒家だった。私たちが門を開くと同時に、年老いた女性が玄関から出てきた。隼人が女性にありがとう、と声をかける。女性は夕飯を作っておいたから、と答え、私を少し不思議そうに見つめた後、にっこり笑って会釈し私たちが乗ってきたタクシーに乗って去っていった。

「僕の祖母です。母方の。元は、ここは祖母の家でした」

「そう」

「どうぞ」

私は彼の家に入った。少年が一人で住んでいる家。私の家と似た、一輪挿しが靴箱の上には置いてあった。そこには何も挿されておらず、寂しく見えた。

椿をとってくればよかったわ。なぜか私はそう思い、口が勝手に動いたようにそう言った。

「椿？」

「うちの庭に咲いているの。紅い椿が」

こんなときに何を言っているのだろうと思ったが、私はそう続けた。

「そうですか。...母は、薔薇が好きでした」

「薔薇？」

「妹ができる前...マンションに越す前はここに祖母と、両親と僕で住んでいました。薔薇を庭で育てていて、この一輪挿しにいつも挿していたんです。学校から帰ると、見て見て、って嬉しそうにしていました。小学生だったから、よくわかりませんでしたけど」

でも、その薔薇も母親が死んで、すべて枯れてしまったそうだ。

「居間にどうぞ。掃除は祖母がしてくれるので、汚くないはずですよ。そちらのソファに」

「ええ」

白いソファに座り、顔を上げる。正面の壁に、大きな額に入った絵があった。薔薇の絵。一輪挿しに刺さった白い薔薇の、油彩画だろうか。

「綺麗な絵」

私が呟くと、隼人が盆に載せた紅茶を持って現れたところだった。

「ああ...それ、僕が」

「え？ 本当？」

「母が育てた薔薇を思い出して描いたんです。だから...下手で」

「ううん、とても綺麗」

この家にあった平穏。それは、私の家に比べて、ずっと短かった平穏。

私が壊した平穏と、彼が終わらせた家族。

「この間のこと」

私は紅茶のカップを手に取り、呟いた。声が震えた。それが自分の耳には、笑っているように、聞こえた。

「どういう、ことなの」

「分かっているんでしょう」

分かっている？ そんなわけ、ないじゃない。何も分からないよ、私には。あなたを疑いもしなかった私には。

「僕が、秋吉七海さんを殺しました」

持っていた紅茶を投げつけて、殴りかかったって良かった。でもできなかった。隼人が浮かべた笑顔は、あまりにも儂げで、痛々しかった。

「七海さんと出会ったのは、あなたたちが卒業した中学校です」

「学校...？」

「有名な、いかにもお嬢様学校、って感じですよ。僕の母もそこを出ていたんです。母と同級生だった人がそこで教師をしていて。その方に会いに行ったんです」

彼はその教師の名を呟いた。私がそこに在籍していたころに数学を習ったことがある。

「その後、校庭をうろうろしていたんです。女子校に僕がいたら、悪目立ちしますよね。でも、七海さんが声をかけてきた理由はそうではなかった。息を切らして走ってきて、僕の腕を掴んで、驚いた顔をした。そして、お姉ちゃん、と呟いた」

七海とこの少年の出会い。

その原因はまた、私。

七海はあの学校で、何をしていたのだろう。

「それから、ため息をついて、ごめんなさい、と言いました。僕は気になって、お姉さんは僕に似てるのかと聞きました。全然似てない。七海さんは怒ってそう言いました。僕は訳が分からなかったけど、七海さんは僕の腕から手を離さなかった」

死にたいといっても、馬鹿にしないかしら。

妹は少年に、そう言ったそうだ。

誰にも言わなかったけれど、私は、死にたいの。

隼人はどうして、と聞いた。

姉の心に私を刻み付けたい。

それが、七海が死を求めた理由だった。

隼人はその美しい顔で微笑み、自分が殺してあげる、と言った。七海は、私に良く似たこの少年を、不思議なくらい信用した。少年の地元である千里町に、たびたび出向いては、彼の家で私の話をした。

隼人は七海が「妹、であること、私に対する七海の異様なまでの思いに興味を持ち、それを聞いた。

「彼女は姿子さん、あなただけが自分のすべてであると言っていました。恋人も要らない。友達も要らない。ただただ、美しいあなたに憧れて、あなたになりたかった」

「どうして」

いつも分からなかった。どうして、七海がそんなにも、私を慕うのか、私になりたがるのか。「美しいもの、というのは、それだけで不吉を呼ぶ。おとぎ話の中の綺麗なお姫様は、幸せになります。でも現実、どうですか？不幸になるくらいに、誰かに思われる気持ち。七海さん以外にもそんな気持ちを持たれたこと、姿子さんにもあるでしょう。美しいものは本当に不吉なんです」

母にも父にも似なかった私の顔。確かに血は繋がっているのに、似なかった。私だけ、美しく生まれた。それを見て親戚たちは皆、指をさし、こそこそと何か言い合っていた。

学校でも、バイト先でも、毎日誰かの思いを無理矢理押し付けられて、人から離れて一歩引いて生活をして。そして私は唯一落ち着ける、自分の家から逃げ出した。

「それは、あなたのこと？」

私とよく似た暗い瞳。少し長く伸ばした黒髪。自分の顔を隠すような前髪。

「あなたが言うならそうかもしれない」

私とあなたは良く似ているから？ いいえ、似ていない。似てなんて、いないよ。

「七海さんの遺言は、あなたにまだ言っていませんでしたね。...沢山傷ついて、私の気持ちを思い知ればいい。世界で一番、唯一の一番だったお姉ちゃん以外は皆誰でも同じ。あなたになりたかった。「あなたが、大嫌い、」

どうして。

どうして。

分からないよ、七海。どうして私なんかになりたかったの？こんなに、生きていて、辛いのに。でも、七海、あなたは何が辛かったの？あなたの痛みが、私には理解できないままにいる。

どうして死んでしまったの。どうして生きて、伝えてくれなかったの。

「お姉ちゃんじゃないなら誰でも構わない。あの人の心に一番残る死に方をしてやりたい。彼女はそう言いました。僕は、彼女を夜中に林へ連れて行き、彼女がどこからか盗んだ刃物で、体中を刺しました。彼女は痛みと、恨み、あなたへの愛を呟きながら、死にました。そして、彼女が最後まで握り締めていた、あなたと撮った写真を僕は奪った。そして、僕が殺人者だと知ってもなお僕に心酔し僕を許そうとするあの刑事を呼び出しました。そして、彼に...」

聞きたくなかった。汚らわしいと思った。儚く、綺麗なだけの少年だと思っていた隼人の、一人の信望者。それに、七海は汚された。憎かった。

「そして、その男は、七海さんの死んだ理由をあなたに早く知らせるために、写真を持たせて、

殺しました。あの男にも、死んだ理由はあるんですよ」

作り笑いをした、隼人。紅茶のカップなど、もっていられなかった。

私は自分の頭を抱えて爪を立て、自分を責めた。隼人を責めた。

「人が死ぬということがどういうことか、分かってるあなたが」

言葉にならなかった。涙がこぼれて、膝をぬらした。

「どういうことか、分かっているからです。七海さんは、殺してくれないのなら自殺すると言っていました。でも、自殺では駄目だった。七海さんは僕が殺しました。でも、それは自殺と同じでした。僕はその手助けをしました。あなたの心から一生、七海さんが離れなくなるように。記憶の隙間から零れ落ちない、大きな傷跡になるように。七海さんが死んだことをあなたに大きく刻み付けたかった」

少年は黙り込み、私の嗚咽だけが部屋に響いた。

もう、嫌。すべて、嫌。

どうして、しんでしまったの。あの人は。七海は。

みんな、こんなに苦しいの？ 私だけじゃないの？ なら、どうして笑っているの。どうして、七海が死んだこと、すぐに忘れてしまうの。すぐに、笑えるの。

「僕が七海さんを殺しました。それをあなたに話したのは、あなたが想像よりもとても、素敵な人だったからです。あなたは僕と似ている」

顔を上げて、睨み付けようとした隼人の顔は今までに見たことのない表情だった。冷たい、微笑。全身が凍る。わずかに見え隠れする狂気。

「こんなくだらない世界に生きているのは、勿体無い。ねえ、死んだらどこへ行くか、僕は想像するんです。きっと、生まれ変わったりなんてしない。天国も、地獄もない。残酷な人生を過ごした僕らが、また生まれてくるなんて、神様はそんなに酷いはずがない。ああ、神様なんて、いないよね。神様がいたら、こんな僕たちを助けてくれるはずだよ」

隼人は、目を閉じた。私は立ち上がり、この家から出ようとした。逃げなくてはいけない。胸の下がざわざわとする感覚。それがまた私を不安にさせた。

目をつむったままの隼人の隣を通り過ぎようとした。

「ねえ。姿子さん。きっと、死んだら、母親の胎内のようなところに行くんです。一緒にいくのは、あなたがいい」

すう、と目を開いた隼人は、左手で私の腕を掴み、座っていたソファから包丁を持ち上げた。

「行きましょう。暖かで、鼓動の音しかないところへ」

微かな、小さな声で、そう言った。

ふらり、と私のほうへ倒れこみながら、胸を刺そうとした。その手は避けることができた。しかし私の左肩に、包丁が刺さる。血が、溢れた。隼人の閉じられた瞼に、飛び散った。白い皮膚を紅く濡らす。私の左側に隼人が倒れていく。床に、頭を強く打ち付けた。

ごほっ、と、空気とともに黄みがかった液体を隼人は吐き出した。薬の、匂いがした。私は、救急車を呼ばなくちゃと、落としてしまった鞆から携帯電話を取り出した。

1, 1, 9。キーを押し、通話ボタンを押した。

助けて。

そう呟いて、それからは、覚えていない。タクシーの中で聞いた、住所を、しっかりと告げたのかもしれないし、それ以外の何かを呟いたのかもしれない。

ねえ、

助けて。

わたし。

私、死にたくないみたいなの。

助かりたいの。

生きたいの。

私と姉は、同じ生き物だと思っていた。

実際は、五つも年齢が違って、外見も中身もぜんぜん違った。姉の姿子は、背も高く年よりも少し大人びていたし、とても美しかった。

九歳の時、私は姉と自分が似ていないと気づいた。姉は美しい生き物だと。私は、美しくない生き物だと。私と姉が一緒にいるとき、大人たちは姉を見つめて、驚いた顔をする。十四歳の、大人びたきれいな姉。

親族の誰だったか、姉をととても気に入っていた。法事や挨拶で会うたびに、姉の容姿をほめた。綺麗ね、お人形のようなね。似ていない、美しくない私は、「かわいいわね」と言われた。私は悔しかった。私は美しくない。姉は、美しいと言うだけで、人に見てもらえる。

十歳のころから、私は姉の真似を始めた。長いまっすぐな髪がうらやましくて、毎晩綺麗に髪を洗って整えて、くしでとかした。母はそんな私を楽しそうに手伝ってくれた。細くて柔らかい髪はすぐに絡まって、姉のようにさらさらとなびかなかった。

私が生きるお手本は、姉だった。お手本そのものになろうとした。姉が歩いた道を、ずれることなく進みたかった。

姉の大人しい少女らしいしぐさを真似した。十五歳の少女を十歳で真似しきることはできなかった。私はまだ子供で、十五歳は大人に思えた。私が知っている姉は、大人だった。誰よりも美しい大人だった。

姉は私が大人びたしぐさをするのを、ほほえましそうに見ていた。その表情はとても美しく、私だけに向けられるということが嬉しかった。世界中の人間に優越感を覚えた。私の姉はこんなにも美しいのだ！ けれど、鏡を見て、その笑顔を真似しようとしても、できなかった。何度も何度も、姉の表情を真似た。ぜんぜん、似なかった。最初から、似ていないのだから。私は美しくないのだから。

いつしか姉は、私が姉の真似をしていることに気づいた。そして、だんだん、私が姉そのものになりたがっていることが分かったようだった。少しずつ、姉は私から離れようとしていった。私はそれを許さなかった。姉を見つめ続けていた。

姉と私を見て、人が「そっくり」だと言うたび、私は嬉しくなった。こんなにも美しい姉に、私は似ている！ 私は少しずつ、姉に近づいている！ 姉が逃げていくより早く、姉になっていく。七海が、姿子になっていく。

十五歳になった私は、五年前の姉そのものといえるほどだった。長い黒い髪、お下がりの、姉が着ていた服。お化粧も覚えて、顔を姉に似せて整えた。

その頃には、親族の誰もが私と姉を美しいと言った。姉だけでなく、私も。そっくりで、美しいと。私はそのたび満足した。けれども、自分の家へ帰り、部屋で鏡を見て、それを割り砕きたい衝動に駆られた。

似ていない。

似ていない。

どんなに真似しても、化粧をしても、私と姉は似ていない。同じ生き物ではない。同じ顔ではない。私は美しくない。

私は姉と同じ美しさを持っていない。

醜い。

鏡を、恐れるようになった。

姉の姿子が駆け落ちをした後、私は更に、狂った。

目が覚めると、私は白い天井を一番初めに、目にした。あまりに白くて、私は、死んでしまったのかと思った。何も無いところにいる、と。

けれど、少し顔を右に傾けると、左肩に痛みを感じた。そして、私の右側に、母の顔が見えた。

「お母さん」

「姿子！」

母は泣いて、私の手を握った、私も、手に力が入らないけど、頑張って握り返した。

傷は、何針か縫って、塞がれていた。私は立ち上がることも禁止された。私よりも、母が心配のしすぎで死んでしまう、というのだ。

母が病室にいる間は、隼人の事は何も聞けなかった。けれど、父が母に休むように言い、母の姉である伯母が家へ連れて帰っていき、父は私と二人で、話を始めた。

一緒にいた少年は、薬を大量に飲んでいたらしい。

そのせいでふらつき、私を殺せなかった。人を三人殺した少年の、四度目にして初めての失敗。それは、自分も死のうとしたためだった。

「痛いよ、」

少年が海で怪我をしたときの、痛がり方は少し大袈裟だった。

人よりも痛みを強く感じる。そのために、自分の体に刃物を当てることができなかつたのかも知れない。彼はどうなったのかと聞くと、ずっと眠ったままだそうだ。私は父に礼を言い、検査を受けたり、警察に話をした。

私は警察に、隼人が七海を殺したことを話さなかった。きっと、そのうち、私が言わなくてもわかることだろうと思ったからだ。

私は、少年をけっして、許すつもりはなかった。

七海。

これから私、どうしよう。

あなたの後を追ったりしない。でも、どうやって生きていこう。

お父さんに聞いたよ。お父さんは、あなたが私の後を追って生きていることを知っていた。あなたの日記に、姉の年を越してしまっても、家に戻ってこなかったら、二十歳を越してしまつたら、見本が無くなって生きられなくなるとあったって、聞いたよ。

ねえ、七海、七海は、私じゃなかったんだよ。私は誰かを追って生きてたわけじゃなかった。これからも、自分の命を絶つつもりはない。あなたとあのひとが死んでも、後を追わない。私とあなたは違う。

私は真夜中に、点滴を引きずりながら病院内をうろついた。そして、宮城隼人の名を探した。その日の夜は見つからなくて、毎晩、毎晩。

そして、退院する前の夜、彼を見つけた。体にチューブを繋がれた隼人を。

私は、その首に手をかけた。彼が言っているように思えた。

姿子さん、殺して。

姿子さんに、殺して欲しい。

力を込めても、何も反応しない。

ねえ、ずるいわよ。

あなただけ、この残酷な世界に生きても、何も無い「死」にたどり着いてもいない。

あなたは一人で、「現実でも死でもない世界」にいる。きっと、あなたがいたかったのはそこなんでしょう？

「自分だけ居たい場所にいるのはずるいわ」

ぐ、と手に力を込めていく。

ざわり。胸の下に、小さなざわめきが起こった。

ああ。

そうね。

私には、できないわ。

隼人とは、違うから。

もし、私の胎内にいる小さな命に気付かれてしまったら、また暗い世界で生きる子供をひとり、増やしてしまうかもしれない。

自分の胎内に生まれた存在に、自分の母親が殺人鬼だと気付かれたくなくて。

私は、隼人から手を離した。

ドクン、ドクン、

ポタ、ポタ。

点滴の落ちる音は、鼓動の早さだった。

今夜はきっと、悪夢を見る。隼人と、七海に責められるかも知れない。死ななかったこと。自分だけ、きれいに生きようとする事。

けれど、私は今晚は、頭痛薬は飲まない。

私は狂ってしまった。

鏡を、恐れるようになった。見るたびに、姉の姿子と違う自分の顔に苛立ち、それに映る自分の顔に爪を立てた。いけないのだ。美しくなくては、同じ顔でなければ、姿子でなければ。

暗い中で涙を流しながら、鏡を見続ける。そんなとき以外は分かっていた。私はどうかしている。姉と私は違う人間で、違う性格であって。姉の真似をする必要は、本当はない。憧れがつのりすぎたのだと、分かっていた。全く同じ人間になることは不可能で、そんな必要もない。

けれど、姉が遠くに離れようとすればするほど、私を遠ざけるほどに、私は姉にならなければならないと狂ったように鏡を見つめ、姉と違うその顔を憎んだ。

姉が駆け落ちしてから、私は更に狂ってしまった。

今まで、姉の歩いた道を歩いていた。十歳の頃から、五年もの間。姉と同じ中学。同じ制服を着て、同じ髪型で学校へ通った。姉のように、上手に友達を作った。けれど、私にはそれが必要なかった。必要なのは姉だけだった。だから、友達も、恋人も、皆いらなかった。ゴミと同じ。そう思い、大事になんて思わなかった。

私は秋吉姿子になるために、姉の後を追って生きていた。それが、突然いなくなってしまった。私は十五歳。姉は二十歳。あと五年、それが過ぎたら？ 私はどうやって、姉になればいいのだろう。二十一歳の秋吉姿子を私は知らない。

私は、姉を探した。父は姉を許さず、勘当した。母は泣き壊れてしまった。だから、私。でも、十五歳の私なんかに、姉は見つけられなかった。

私は、姉と同じ高校に入った。携帯を買った。着信音を、乙女の祈りに設定した。五年前の姿子。姉の部屋に入り、あの時姉が座っていた机の椅子に腰掛けた。振り向くと、あのときの幼い私がいるかのようだった。笑いながら、着信音を勝手に設定する。少し顔を上げて、鏡に映った顔。それは半年の間見ていない、姉の姿子に見えた。でも、違った。姿子ならばこんなことはしない。

もう、やめよう。

そう思った。姉になれないのならば、姉の一部になればいい。

姉の、姿子の一生に残る、大きな傷跡になればいい。

そう思いついた私は、口元をゆがめた。鏡に映るのは醜い私。秋吉七海。

沢山傷ついて、私の気持ちを思い知ればいい。

世界で一番、唯一の一番だったお姉ちゃん以外は皆誰でも同じ。あなたに殺されることすらできないのならば、ゴミによって汚されて、一番ひどい死に方であなたの傷になってやる。

私は、私を殺す人間に、遺言を伝えた。恨みの言葉。呪いの言葉。美しい姉の顔をゆがめることができるであろう言葉。あなたは、私から逃れられない。私が死んでも、苦しみ続ければいい。あなたが生まれたことを、私は呪う。

あなたになりたかった。

じゃなきゃ、生きてなんていたくなかった。

あなたの大きな傷になろう、
あなたが、大嫌いだから。